



跳ぶ勇氣はどこから？

大平 英樹（心理学）

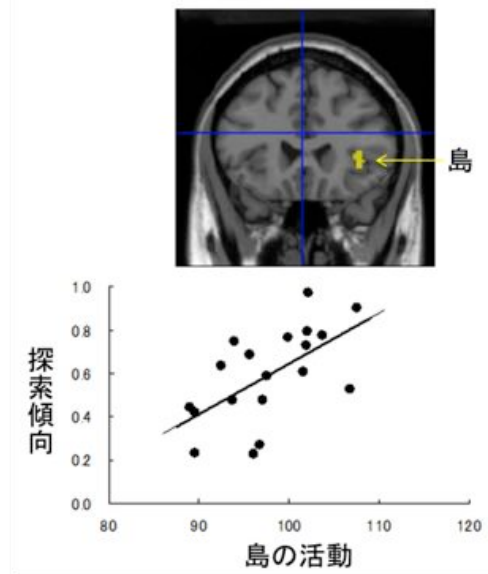
いつもの店でいつもの料理を食べるのが好きか、初めての店で新しい味を試してみるのが好きか。あなたはどちらでしょう？ 前者の方略を最適化，後者の方略を探索と呼びます。最適化は一定の満足が得られる保証があるので安全ですが，それだけでは行動や知識の幅が広がりません。ときには探索をすべきなのですが，それには勇氣が要ります。マルクスの言葉を借りれば，「決死の跳躍」が必要なのです。

失敗するリスクを冒して跳ぶ勇氣はどこから来るのか？ 神経科学者のダマシオは，身体を興奮させる交感神経系の活動が脳に影響を与えることで，不確実な選択肢を敢えて選ぶように私たちの背中を押すのだという仮説を提唱しています。確かに，何かに賭けようとする時，心臓の高まりや身体の震えを感じます。それが単なる反応だけでなく，意思決定にも影響するというのは興味深い考え方です。実は，ダマシオがこのような発想に至ったのは，17世紀の哲学者スピノザや，19世紀の心理学者・哲学者ジェームズの理論に触発されたことだとも考えられています。

私たちの研究室ではこの仮説を検証するために，参加者に お金を賭けたギャンブル課題を行ってもらい，脳活動を観測し同時に血中のアドレナリン濃度を測定して交感神経系活動を評価しました。すると，課題中にアドレナリン増加が顕著だった参加者ほど，さまざまな賭けパターンを試す探索の傾向が強くなりました。同時に，アドレナリン増加は脳の内側部にある島（とう）という皮質を活性化しました（図を参照）。島は身体からの信号が投射され，統一的身体イメージが表象される脳部位です。さらに，島の活動が強いほど，探索傾向が強まりました。つまり，身体の興奮が島の活動を媒介して探索傾向を促進するという，仮説を支持する知見が得られたのです。

現代の心理学は，このような生物学的な方法をも使って，人間の精神活動や行動の原理を探求しています。

ギャンブル課題時の島の活動と，探索傾向との関連



授業紹介—File60

ルイ敬虔帝の伝記を読む ～ドイツ語とフランス語と時々ラテン語～

専攻：西洋史学（歴史学・文化史学コース）

授業名：西洋史演習

この授業は，800年に西ローマ皇帝に戴冠されたフランク王国の王シャルルマーニュ（カール大帝）の後継者で，「偉大なる皇帝の卑小な息子」と称されてきたルイ敬虔帝の伝記を読む授業です。テキストはドイツ語・フランス語版があり，自分が読める方を選択して担当箇所の音読と翻訳を行います。しかし，担当箇所を読むだけでは物事の経緯が分からないので，全体に目を通して授業に参加することが求められます。



ルイ敬虔帝の伝記（フランス語版とドイツ語版）

読んでいる伝記は，もともとはラテン語で書かれたも

ので、これをそれぞれドイツ語とフランス語に訳したものを使用しているのですが、時々原文のラテン語の解釈が違っているために、2つの訳が異なっているところがあります。ドイツ語とフランス語で書いてある内容が違うことに気付くことができても、どちらが正しいのかはわかりません。そんな時は、ラテン語版を参照して、どちらの訳がより正確なのかを確認します。この言葉の壁が、この授業の難しさであり面白さでもあります。

また、キリスト教に関する知識が求められるのも、苦労する点です。ルイ敬虔帝の「敬虔」という添え名はキリスト教の信仰に篤かったことに由来します。そのため、彼の伝記の中にはキリスト教の儀式や祝日を表す専門用語がたくさん出てきます。辞書や聖書で調べれば意味は分かりますが、なぜこの儀式が必要であったのか、この行為がどのような意味を持ったのかということを考えなくてははいけません。そしてこれらのことを理解することが、その時代の背景を理解することにつながるのです。

この授業は、ルイ敬虔帝の伝記という、カロリング期に書かれた史料の解釈を通して、彼自身の生涯だけでなく、当時の社会情勢、さらには人々の精神世界までも浮かび上がらせるものだと言えます。

[東埜 文香 (学部3年)]

授業紹介—File61

サンスクリット語・パーリ語で読む仏典

専攻：インド文化学（哲学・文明論コース）

授業名：パーリ語写本読解演習

パーリ語で書かれた仏典の写本を読む授業です。インド文化学の専攻の授業ではサンスクリット語やパーリ語、チベット語といった少し珍しい言語を文法から学ぶことができ、この授業のようにそれを使って文献を読んでいく授業が多くあります。最初は文字を覚えるのも大変でなかなか読めなかったのが、授業を通してだんだんと読めるようになっていくのが楽しいです。

この授業では、日本でも古くから広く信仰されている「仏頂尊勝陀羅尼経」のサンスクリット語の写本を受講者で分担して読んでいます。（続いてまだ研究のないパーリ語写本の方も読むことになっています。）資料になる写本が一本しかなく、欠損箇所もあるので、漢訳や他のサンスクリット語の仏典も使い、欠けている部分があればできるだけ補い、修正しながら読んでいきます。元からある文を読むというだけでなく、自分で考えて修正しながら読むというのが難しいですが、何通りも補い方を考えることができるというおもしろさもあります。また、今期はこうした教室での授業だけではなく、梵字で「仏頂尊勝陀羅尼」が書かれた経幢を見るために、近所にあるお寺にみんなで歩いてフィールドワークにも行きました。学校のすぐ近くのお寺で今授業で学習しているものが実際に信仰されているのを見ることができて感動したのと、その日は晴れていて天気もよかったので遠足のようにとても楽しかったです。この授業のように、日本に浸透している仏典についてパーリ語やサンスクリット語、漢訳などいくつかの言語を通して学習できるということはとてもおもしろいですし、また貴重な経験であると感じています。

[真野 結唯 (学部4年)]



サンスクリット写本と授業風景

雨の季節ですね

雨の少ない今年の梅雨でしたが、本誌編集時点になってようやく本格的な雨が降るようになってきました。大学キャンパスも授業開始時間の直前は紫陽花よろしく傘の花が列をなしています。2003年に地下鉄「名古屋大学駅」が開業して今年で10年、それまでは東山線本山駅からの長～い行列でした。名古屋大学駅は大学の真下にあり、3番出口は工学部のIB館へと直結しているほどです。文学部へは1番出口から出て豊田講堂とは反対側に歩くのですが、傘を差すのもほんの少しの距離です。

(U記)

最近の文学部